後藤石水の作庭を軸としてみた近代新潟地方における作庭活動

The Garden Design Activities of the Modern Niigata Region through the
Works of Landscape Gardeners 'Goto Sekisui'

後藤 敏之
Toshiyuki GOTO

東京農業大学大学院 造園学専攻

Department of Landscape Architecture, Graduate school, Tokyo University of Agriculture

Key Words : 1. 後藤石水 2. 新潟地方 3. 作庭活動 4. 近代庭園

1. Goto Sekisui 2. Niigata Region 3. Garden Design Activities 4. Modern Gardens

1. 研究背景と目的

後藤石水^{せきすい}とは、明治初期より現在まで四代にわたり、新潟県を中心に、代々当主が後藤石水と名乗り作庭活動を行っている庭師である。後藤石水については、「作庭家後藤石水三代の庭園デザインにみる近代日本庭園の展開」(後藤敏之:2006)において、後藤石水初代から三代目を対象に、現存する庭園、図面、文献等の調査、地域性や作庭当時の時代背景との関係の分析から整理し、庭園デザインが近代から現代へと展開していく過程の一部を明らかにした。

上記の研究では、新潟地方において後藤石水と同時期に活動していた作庭家や、同時期に築造された庭園作品との関係という視点からの考察は行わなかった。

そこで本研究は、後藤石水三代の人物像、作庭活動や庭園作品の変遷と、後藤石水と同時期に活動した作庭家、その他の著名な庭園作品とを、同時代的に整理した。このことから、後藤石水の作庭活動の特徴、同時期活動作庭家との関係等を分析し、明治から昭和までの、新潟地方における作庭家の活動状況について一考察を行った。

2. 研究対象

本研究では、後藤石水初代から三代目までの作庭活動期である1868～1957年を対象とする。

また本研究において、近代とは、明治時代から昭和時代戦前期までを指し、現代とは、昭和時代戦後期以降を指すこととする。

3. 研究方法

3.1. 文献調査

後藤石水三代と同時期に活動した作庭家に関する文献、図面、庭園写真などを整理し、庭園作品の名称、作庭年、所在地、所有者、庭園の特徴、作庭活動の状況などの把握を行った。

新潟地方の著名な庭園に関して、地元新聞「新潟日報」(1942～)の前身である「新潟毎日新聞」(1910～1941)が新潟地方に散在する庭園の所有者を取材し、「庭園譜」と題して7回にわたって連載(1930年5月15～21日)した記事に掲載された8庭園、新潟日報事業社が、第一線で庭と接する新潟県造園建設業協会および特別編集協力委員の指導のもと発行された『新潟の名園』(新潟日報事業社出版部:1989)に掲載されている26庭園から、重複しているもの、後藤石水三代が作庭したものを除外し、明治期以降作庭の10庭園について同様に整理し、庭園作品の把握を行った。

3.2. ヒアリング調査

後藤石水三代と同時期に活動した作庭家について、直接的、間接的に知る造園家、庭園所有者、『新潟の名園』の編集者などへの聞き取り調査を行い、作庭家の系譜、人物像の把握、作庭活動の状況、文献調査内容の補足を行った。

4. 結果および考察

本研究の調査において、後藤石水三代以外の作庭家、その他の著名庭園について、正確な作庭年、作庭活動期を伝える資料が少ないため、聞き取り調査で得た口伝による推定年で、整理を行った。(図-1)

4.1. 後藤石水三代と新潟地方の作庭家について

4.1.1. 初代石水と同時期活動作庭家

初代石水^{けいたろう}敬太郎(1857～1943)は、新発田藩^{しんぱた}の御庭方であった後藤岩蔵^{いわざう}の息子で、初めて庭師後藤石水を名乗った人物である。明治維新後、新発田藩の廃藩により新潟市東湊町に移り、茶道、華道の教授をするとともに、作庭活動および庭園管理を行っていた。

同時期活動作庭家として、新潟県刈羽郡の庭師の祖といわれ、通称松屋爺さんと呼ばれる相沢熊蔵^{あいざわくまぞう}(1822～1905)がいる。熊蔵は、江戸本所小梅町の徳川家および諸侯へお出入りの庭師の家に生まれる。明治維新によって社会情勢の一変した江戸を嫌い、諸国流浪の旅に出たが、明治初年、越後に来て刈羽郡枇杷島に落ちつく。その後、松の山村の村山邸の作庭に通っている間に、下加納の加藤氏、加納の光賢寺住職藤井氏などと知り合いとなり、加納に居を移した。その人物像は、頑固一徹、どんなに金を出しても自分の気に入らぬ仕事はせず、自分の仕事に対しては、一切他の干渉を許さぬ職人気質であった。熊蔵は、各方面の人に愛され刈羽郡の名家といわれる家のほとんどを手がけることになった。その庭園作品は、現存庭園は減少しているものの、加藤邸庭園(写真-1)にその作品をみることができる。

また、新発田藩の御庭方であった金藤紅葉郎^{きんとうもみじろう}(江戸後期頃生没年不詳)がいる。その人物像に関する資料は少ないが、明治維新後、当時の豪農などの庭園の作庭にあたった。白い足袋を履き、金藤様と呼ばれ格式が高い庭師であった。庭園作品には、越後の豪農斎藤家庭園がある。その庭園は、約2000坪の広大な池泉回遊式庭園で、明治末期から救済事業の一環として作庭が開始され、大正末期に至る十数年の歳月をかけて完成した。斎藤家庭園は、終戦後の農地改革の折、邸宅を手離すことになり、考順寺がその大半を購入し、現在は考順寺庭園(写真-2)となっている。

この時代は、明治維新による社会情勢の変化にともな

写真-1 加藤邸庭園(柏崎市加納)

(出典：庭 167号：建築資料研究社)

写真-2 孝順寺庭園(阿賀野市保田)

(出典：新潟の名園：新潟日報事業社出版部)

写真-3 松雲山荘庭園(柏崎市緑町)

(出典：新潟の名園：新潟日報事業社出版部)

い、藩の御庭方から、一部の裕福な家や、寺社の庭園管理および作庭を行う庭師へと転身する傾向がみられる。

4. 1. 2. 二代目石水と同時期活動作庭家

大正期から昭和戦前期において、二代目石水吉作^{よしきく}（1883～1956）は、初代石水の作庭活動に影響を受け、その造園技術、デザインを後継し、4～5 人の内弟子を従え、初代作庭の庭園の管理を行うとともに、その当時、米穀の流通などで繁栄した商家などの作庭を行っている。また、群馬県高崎市の山徳園の作庭、明治神宮の植樹奉仕に参加するなど、広域的な造園活動もみられた。

同時期活動作庭家として、相沢熊蔵の弟子の一人である蓮池周作^{はすいけしゅうさく}（明治後期頃生没年不詳）がいる。新潟県柏崎を中心に庭園管理および作庭を行っている。その庭園作品は、実業家飯塚謙三が施主である、松雲山荘庭園（写真-3）がある。この庭園は、蓮池周作から、その息子である軍一郎^{ぐんいちろう}（大正前期頃生没年不詳）の二代にわたり十数年の歳月をかけて作庭された。

この時代は、御庭方から転身した庭師が養成した弟子、作庭及び庭園管理の際に手元として作業に携わった人が、習得した造園技術を基に、各地で独立した造園活動を行うという傾向がみられる。

4. 1. 3. 三代目岩雄と同時期活動作庭家

昭和戦後期が主な作庭活動期となる三代目石水岩雄^{いわお}（1906～1957）は、幼少期より初代や二代の造園活動に触れ、青年期には東京府立園芸学校に進学（1924）し造園を学んでいる。東京での造園学習期に芽生え、実際の作庭活動によって実現化された、服部家庭園（1949）を初めとする、三代目岩雄の作庭活動には、初代・二代にはみられない作庭手法や庭園デザインがみられた。

この時代の作庭家は、戦後の社会情勢が安定すると、戦前から引き続き作庭活動を行う者、京都や東京などへ修業又は進学し作庭技術を習得した、戦前期の作庭手法とは異なった活動を行う者が現れ、作庭活動が多様化する傾向がみられる。

4. 2. 後藤石水三代と同時期作庭の著名庭園について

近代の著名庭園の施主は、江戸時代から続く豪農、大地主、実業家など当時の新潟を代表する財閥であり、そ

写真-4 清水園（新発田市大栄町）

（出典：新潟の名園：新潟日報事業社出版部）

写真-5 植木家庭園（柏崎市与板）

（出典：新潟の名園：新潟日報事業社出版部）

写真-6 伊藤家庭園（北方文化博物館新潟分館）

（新潟市）（出典：新潟の名園：新潟日報事業社出版部）

の本邸や別邸の作庭が主として行われている。

現代になると、近代のような規模の作庭は減少している。また、田中泰阿弥(1898～1978)による清水園(写真-4)の改修をはじめ、笠原米作(明治後期頃生没年不詳)作庭の植木家庭園(写真-5)を田中泰阿弥により改修、初代石水作庭の伊藤家庭園(北方文化博物館新潟分館)(写真-6)の茶室周りを田中泰阿弥により改修、広瀬万次郎(明治前期頃生没年不詳)作庭の椿寿荘庭園(写真-7)を初代後藤石水による一部改修など、戦災による荒廃や施主の要望により、近代作庭の庭園の改修または一部改修が多数行われていることが明らかとなった。

写真-7 椿寿荘庭園(田上町田上)

(出典：新潟の名園：新潟日報事業社出版部)

西暦	1857	1873	1883	1895	1906	1912	1922	1923	1926	1927	1930	1934	1937	1940	1943	1945	1947	1949	1950	1955	1956	1957
年号	安政 4年	明治 6年	明治 16年	明治 28年	明治 39年	大正 元年	大正 11年	大正 12年	昭和 元年	昭和 2年	昭和 5年	昭和 9年	昭和 12年	昭和 15年	昭和 18年	昭和 20年	昭和 22年	昭和 24年	昭和 25年	昭和 30年	昭和 31年	昭和 32年
庭園作品				● 伊藤邸		▲ 落合邸	▲ 和泉屋	● 原邸	● 長谷川邸	● 若松屋	● 中野邸	● 峰村邸	▲ 橋本邸					◆ 服部邸	◆ 中静邸	◆ 竹山邸	◆ 保栄劉旅館	◆ 坪井邸
後藤石水各代の生没年と造園活動期	● --- 初代 敬太郎 --- ◆										◆ --- 二代目 吉作 --- ◆										◆ --- 三代目 岩雄 --- ◆	
主な施主の変遷	豪農・石油採掘・石油精製・北洋漁業 新潟を代表する財閥										越後味噌醸造元・穀物卸売業・料亭・割烹・呉服店 米穀の流通・商業の発達										造船業・鉄鋼業・医者・旅館・寿司店・農業・総合商社 経済成長期	
活動期	初代石水と同時期 相沢熊蔵(江戸後期～明治後期)										二代目石水と同時期 蓮池周作(大正期～昭和期) 蓮池軍一郎(大正期～昭和期)										三代目石水と同時期 田中泰阿弥(1926年頃～1977年頃)	
美石(不詳)	ねこ(明治初期)										長嶋(大正期～昭和期)										高橋明才(昭和戦後期～)	
オオクラ(不詳)	金藤紅葉郎(明治期～大正期)										コジマ(～昭和期)											
明治から昭和期作庭の著名庭園	市島家庭園(明治期) 川上家庭園(明治17年) 住雲園(明治期)										考順寺庭園(大正末期) 椿寿荘庭園(大正7年) 松雲山荘庭園(大正後期) 植木家庭園(大正初期)										伊藤家庭園(昭和31年) 植木家庭園(昭和42年改修) 清水園(昭和31年改修) 翡翠園(昭和53年)	

註:1)「庭園作品」欄の凡例、●:初代の作庭、▲:二代目の作庭、◆:三代目の作庭
2)「庭園作品」では、作庭年度の不明なものを除外した。
3)「後藤石水」の線グラフで実線期間は、造園活動を行っていた時期を示す。
4)「明治から昭和期作庭の著名庭園」の作庭年は、文献調査及びヒアリング調査から得た推定年で整理している。

図-1 後藤石水三代と同時期活動作庭家及び著名庭園

参考文献

- 1) 新潟県教育委員会(1987): 新潟県の庭園(下越・佐渡地区): 新潟県教育委員会
- 2) 新潟県教育委員会(1990): 新潟県の庭園(上越・中越地区): 新潟県教育委員会
- 3) 新潟日報事業社出版部(1988): 新潟の名園: 新潟日報事業社出版部
- 4) 山田良平(1967): 豊耀園記
- 5) 山田良平(1970): 碑は語る: 柏崎日报社
- 6) 龍居竹之介(2006): 庭 167号: 建築資料研究社
- 7) 田中泰阿弥研究会(1999): 生誕百年記念展 孤高の庭匠 田中泰阿弥: 田中泰阿弥研究会
- 8) 田中泰阿弥研究会(2005): 孤高の庭匠 田中泰阿弥展: 田中泰阿弥研究会
- 9) 後藤敏之(2006): 作庭家後藤石水三代の庭園デザインにみる近代日本庭園の展開: 日本庭園学会誌第14・15合併号, 33-36